日本のシャーマニズム

－堀一郎『日本のシャーマニズム』を中心として－

1. シャーマニズム

1-1 シャーマニズムとは

エクスタシー技術を身につけた特殊な呪術宗教者（シャーマン）と、
これを取り巻く信仰群によって形成される宗教現象：神秘主義的、密儀的
「病気治し」、「うらない」＝呪力を超自然界との密接な関連の元で行使する。

1-1-1 基盤：アニミズム：天地万物に精霊の存在を信ずる。

：典型：シベリアから北東アジア

(本来) 最高神や思考存在の観念はない。

善悪、正邪、善神悪魔のような二元論は認められない。

しかし、外部からの影響⇒天界の至上神の信仰、宇宙観などが混入

中国

インド-チベツ：ラマ教の影響

イラン：ミトラ教の影響

※人間の持つ最古の文化であり、歴史をこえてそれぞれの民族、その社会構造、風土、
歴史的環境などに応じて種々の分化や習合をとげてきた最も長い生命力を ほこる文
化所産とみるべきもの。

【大和朝廷の天孫降臨思想】大和朝廷は、大陸の王権思想の影響のもとに、太陽崇拝を意識的に選択肢、そこへ「天つ思想」を結びつけた：本来、天の信仰はない→雄略期（倭国の統合のほぼ完成、治天下の大王）：大王の政は「天の下」全域に対するものであるという意識＝伊勢で日の神まつりが始まる：大和で祀っていた太陽神〔天照大神〕を伊勢に遷し、大和という土地の国魂、穀霊神的な「太陽崇拝」から、大王が独占的に祀る「ただ一つの太陽神」、大王の天下を照らす「天つ神」の祭祀へと飛躍を図った。6世紀（継体、欽明朝：おそらく継体）。神武東征伝説：神武が、あらかじめ倭国全体の統治を約束されていた「天つ神の子孫」の位であることを示す。同時に神功皇后、武内宿禰による三韓征伐と応神天皇即位伝承の成立。日本武尊伝説（朝鮮出兵の正当化、九州から東国の吸収の正当化）。欽明朝のときに伊勢の日神祭祀の復活：天皇は降臨した日の御子の末裔。7世紀末（百済の滅亡との関係）、国生み神話、天孫降臨神話、天照大神。【神道】

2. シャーマン

2-1-1 類型

世襲継承：サモエード、オスチャック

召命：トゥングース、ヤクート、アルタイ諸族

1. シャーマンとしての資質を持っていること

(一般に：神経質、気むずかしい、興奮しやすい、夢見がち、幻覚や意識喪失、失神、てんかん性発作をおこしやすい)。

2. エクスタシー的訓練（夢、トランス）：イニシエーションと同じ役割

イニシエーション：死、神秘体験（呪的燃焼、内的熱体験、天界飛翔、他界遍歴）、再生

3. 伝承的訓練

2-2-2 教祖と民衆

1. シャーマン：呪的カリスマ
2. 民衆：集団的オーギー、集団的エクスタシー

カリスマへの人格委譲による聖界との交流

オーギー＝人格の転換、社会秩序の倫理的拘束が一時的に破棄されるような
集団的恍惚と興奮の状態。

2-2 アノミーとシャーマン

社会の変革期（民衆の不安、価値観喪失、体制崩壊）＝アノミー（規範喪失の混沌状態）

→日本のシャーマニズムが関与。（アノミーにおける個人と社会の反応(マートン)）

1. 適合
2. 改革
3. 宗教的処理
4. 逃避
5. 反抗

2-2-1 アノミーにおける宗教の態様

- 1). 社会のアノミーの状態が既存の宗教組織などでは処理できないとき
↳新しい宗教組織
- 2). 高度のアノミーが起こっても社会がなお活動し続けるとき
↳古い宗教が簡素で強力な形に脱皮

2-2-2 日本 幕末維新时期、大正デモクラシー終焉期、敗戦後＝新興宗教運動

シャーマニズム的要素が内在

- 1) 侵入する文化によって激化した社会的危機
- 2) カリスマ的指導者
- 3) 黙示的なしるしと奇蹟
- 4) エクスタティックな行動
- 5) シンクレティズム的教義

幕末期

（世界の終焉が即ち理想の出現につながるという感覚が蔓延していた【概説】）

- ・ 国家神道系・禊、神理、神習、大成、修成
- ・ 江戸時代の富士講や御嶽講が再編成されたもの：実行、扶桑、御嶽、松山
- ・ 講社や特定神社組織の再編成：神道本局、大社教
- ・ 黒住、天理、金光、蓮門：

行者や修験を媒介として神がかりした教祖により創唱

大正末

- 天理、金光、黒住の発展
- 大本、ひとのみち教団

戦後

- 大本教から分立：成長の家、世界救世教、世界救世大本愛善苑（大本）
- ひとのみち＝PL教団

日蓮宗系：霊友会→立正佼正会、仏所護念会
創価学会

教祖：呪的カリスマとしてのシャーマンの要素、

黒住宗忠（1780-1850：太陽＝天照大神と自己の全生命が一体となる神秘体験、大病克服、「陽気」を吹きかける「病気直し」＝すべての人間は天照大神の「分心」）。中山美伎（1798-1887：「三千世界」をたすける神（てんりんわう：天理王命）が降りた。自らを赤貧状態に追い込んだ護、1860年代から安産と「病気直し」。「月日親神」創世神話：人間は「神の子」として平等）。赤沢文治（「金神」から、神の言葉に難儀している人びとに取り次ぎ活動をするよう託宣）。川手文治郎、出口なお、出口王仁三郎等々。

特徴

- ・ 先天的に異常体質。入巫前は病弱、孤独を愛する傾向、幻覚、幻想体験
- ・ 危機意識、社会不安、熱病などによるイニシエーション的違和体験
- ・ その結果の脱魂、意識喪失状態の元における神秘体験
- ・ 入巫後の人格変化、生き神としての自覚、巫術を駆使。治病、
別教団に入信し、そこでの伝承的知識や訓練を身につける者も。
- ・ 体験から得た教理書や啓示文学

3. 密教と山伏

日本仏教

8世紀中葉に本格的に発展。宗（南都宗など）：共同学習団。

8世紀後期～末期：法相と三論を学ぶ僧の集団が有力に（宗派の祖系）。

806年、年分度者を宗派単位に分割（最澄の提案）：宗派の本格成立。【概説】

前提：シャーマニズム：仏教、とくにラマ教（タントラ教起源）との接触によって最後の形態が整えられる。

【タントラ教（密教の根源）】ヒンドゥー教のシヴァ神の妃、シャクティの性を崇拝する一派より発生。8世紀ごろ仏教に摂取。→人身供犠や性的エクスタシーを通じて神人合一を説く即身成仏の教えに（シャーマニズム的要素の混合）。

ヒンドゥー教：威力ある神に「非常に熱い」「持っている」などの表現を使う。

tapas: 苦行的努力 > 極度の熱さ 「法句経：仏陀は燃えている」

燃焼＝聖化＝人間状態からの超越

タントラ派：クンダリーニの自覚「燃焼」：軍荼利明王（憤怒、火焰、蛇神）

蛇神：性的エクスタシー

（蛇：性力の象徴、シバ神の陽根をとりまくエクスタシー）

cf. 不動明王：火焰を背負う憤怒像

孔雀明王、梵天、大自在天、ガルダ（文殊の化身：迦楼羅）、シュカ

（仏の化身：鸚鵡）＝鳥頭有翅、

菩薩型で鳥に乗った尊像：ヒンドゥー教を通じて古代インドの呪術的宗教的神秘体験としての呪的燃焼、呪的飛翔が図象化、象徴比喩化されて仏像に入った。

3-1 日本の密教

奈良時代：雑密

空海：真言宗＝仏教界、貴族社会に歓迎、最澄も空海から学ぶ（泰範の天台離脱：絶交）

【受容の背景】呪的カリスマとしてのシャーマンの存在＋神と人との自在なる相互交流の観念、実修の存在

空海：青年時代、民間の呪術宗教者：苦修練行の神秘体験。

→即身成仏：

「理具の即身成仏」（凡夫の肉身のままで大日如来の神理と一致したとき）

「加持の即身成仏」（如来三密の力によるもの）

「顕徳の即身成仏」（肉身のまま三密の修行を成就して法性の万徳を顕現）

【最澄】(762-822)：785年東大寺（華嚴宗）で受戒。比叡山で修行生活。華嚴経学を通じて天台に出会う。桓武天皇の信任を得て、804年、遣唐使。帰路、越州の順暁から密教の付法を受ける。桓武天皇は密教に関心を持っていた。帰国後806年、年分度者の勅許が降りるが、天台宗を起すのが、止観業（天台）1名、遮那業（密教）1名であった：天台密教化の要素。【教義】：法華一乗のもとに華嚴をはじめとする代表的な仏教思想の統合をはかろうとするもの（この時代の、末法意識を背景として、「法華経」こそが末法の時機にふさわしい教えであるという考え〔時機論〕があった）。一乗真実説に基づき法相宗の三乗真実説を批判。法華一乗こそ迂回せずただちに悟りの世界にいたる「直道」である。密教も天台の教えに融合（円密一致）。大乘の利他行を実践して鎮護国家の実現を目指し、比叡山内に南都仏教から独立した大乘戒壇の設立を要請した：東大寺の具足戒を小乗戒として否定。俗人にも授ける菩薩戒によって正式な僧侶を生み出そうとした。

【空海】(774-835)：沙門から虚空蔵求聞持法を授かり、室戸崎などで修行。804年遣唐使。日本留学僧として長安に入り805年、インドの声明や悉曇、胎蔵、金剛界、阿闍梨位の灌頂を受ける：正統な密教をすべて受法。806年帰国。平城天皇の歓心は買えなかったが、嵯峨天皇の外護のもと真言密教の宣布に努めた。最澄の円密一教に対して、密教の完全優位を説く（最澄との決別の原因）。

【教義】：「大日経」「金剛頂経」に基づいて、法身の大日如来を教主とする（純密）。雑密に対して教義体系、儀礼の面で格段の差。816年高野山。822年東大寺に真言院を創立、823年東寺を勅賜。顕教（法相、三論、天台、華嚴）と密教（真言宗）を比較して、真言宗の優越性と独立性を明らかにする。顕教は「悟りの世界は言葉で説明できず（果分可不説）、成仏には極めて長い時間を有する（三劫成仏）とする」「浅略の教え」であるが、密教は「悟りの世界を真言によって表すことができ（果分可説）、この身のままで成仏できる（即身成仏）」「秘儀の教え」。

【南都仏教への影響】 淳和天皇「天長勅撰六本宗書」によってそれぞれ単一の正統教学のみを奉ずる南都六宗へ。南都仏教で密教も併修。全宗派の密教化。 【概説日本思想史（以下、【概説】）】

天台の密教化

円仁、円珍：最澄の段階で不十分だった天台法華教学と密教を融合させる。

安然：「五蘊即法界」：衆生則ち仏なり。煩惱即菩提、生死即涅槃

=現世成仏、妙覚成仏、身作仏（本覚思想：中国の天台の学説を大きく変える）

※金剛、胎蔵の二元論的教理から「両部神道」（伊勢神宮を仏教教理で説明）。天台密教の中から「山王一実神道」（三諦円融、一心三観）が出た。

安然以降（中古天台）：本覚思想：台密の完成＝鎌倉仏教に大きな影響。

e.g.日本人の価値観には「現実肯定の傾向」や、外面的行為でなく「内面的心情」を重視する傾向がある。本覚思想はこのような傾向から影響を受けた。本覚思想は歌道、能楽、茶道、歌道な

どの中世の芸術論の理論化にも用いられた。【概説】。

日蓮：真言批判。しかし、比叡山時代に身につけた本覚思想から完全には脱却できない。

「当体即仏」「受持即仏」「修得顕現」

禅宗：「即心是仏」「即心即仏」：悟りが現身で得られる。

親鸞：空海の説に異常な関心。

→台密、東密時代は平安中期以降思想的発展はなく、事相（実践）中心の矮小化された祈祷仏教へと変質し、多くの流派を生じさせた【概説】

◎日本の仏教の特異性：日本人がインドや中国の膨大な思想と文化群のなかから大胆な自由選択をなしとげたということ。

【儒教】5世紀伝来、間接的、断片的摂取。

【道教】4世紀伝来、「神仙思想」…道教經典、道士、道觀は導入されない。道教「的」断片が残るのみ。

【仏教】6世紀：呪術として受容。經典、僧侶、寺院の導入。200年かけて一定水準の理解に達する。百濟、聖明王－仏教の利点：1.教義が深淵、2.利益が分野を問わず大きい、3.インドから東アジア諸国における信仰実績。日本は「2.現世利益」において受容：「藩神」。僧尼が多い：「藩神」に対する巫者の役割（僧尼の役割が是正され、教義、教理にしかるべき地位が与えられるのは7世紀）。

【仏教祭祀】

本来の日本の祭祀：季節に応じた秩序と豊穰＝総合的な内容：具体的、個別的な要求に応える多様性は乏しい。一方、**仏教祭祀**は総合的祈願、富裕・治病・怨敵打倒などの具体的現世利益、死後の安穩（倭人にとって馴染みが薄い）。祈願を実現する「呪力」は実証済み〔中国仏教、百濟仏教、新羅仏教：現世利益的仏教〕。視覚的、聴覚的アピール（麗々しい装束、風変わりな姿の僧侶、神秘的な読経）＝豪族たちを引きつける〈呪力によって帰依を集める〉。645年、蘇我氏が倒れる→大王家が仏教を管轄下に組み込む：急速に国家宗教の色彩を帯びる＝奈良末までは仏教祭祀が圧倒的地位を占めることはなかった。宗教的救済の意識も薄い（但、厩戸皇子：「諸善奉行。諸悪莫作」「世間虚仮、唯仏是真」：救済の萌芽）。

【『日本』宗教の形成】

天武。持統：天皇の地位の確立（「天皇」＝天照大神直系の「現神」、「日本」、「記紀」など）。現神：自らも呪力をもつ⇒神と仏の祭祀を国家主導で組織化した上で統一的に管理し、呪力を国家護持に集中的に発動せしめる体制。

「神祇」：伊勢神宮を長天とする神々の体系化、組織化

＝各地の主な神々の社を官社に指定。村々の祭りは基本的に従来のまま（養老令、神祈令）751年執行⇒共同体のカミ祭りに官社制が持ち込まれたことで祭祀共同体の中から公的権威をおびた管理者が登場。社に不動産が生じて神社が成立する。8世紀：官社の増加→798、官幣社と国幣社に分離。9世紀前後には名神祭や神階の授与が新たな社格制度となる。【神道】。

↳民間：国家神祇に組み込まれた氏神、地域神祭祀から疎外：別移相の信仰世界へ
「仏教」：国家管理、護国経読誦→国分寺、南都六宗へ。

↳民衆には疎遠。直接民衆を教化する僧侶の出現。国家仏教とは別の民衆仏教の世界
中国と内実の違う国家仏教体制、微妙に異なる教学理解、在来信仰の違いによる独自の民衆信仰⇒中国仏教の「模写」ではない「日本仏教」の出現【概説】

3-1-2 密教の「異常なまでの」浸透の理由

- ・シャーマニズムへの慣れ

宗教政治的カリスマとしてのシャーマンへの自己委譲の歴史的伝統的体験

↳ (ロバート・N・ベラ = 日本の宗教の基礎構造)

- ・恩恵施与者としての超従属者 (神、君主、領主、首長、家長、両親) に対する宗教的行為、すなわち尊敬と感謝と報恩の思想がふかく存在していること。
- ・存在の根拠、実在の内的本質としての超従属者に対する何らかの形での自己委譲、同一同化の試みのみられること。

∴ 神を人間の延長線上にみる特殊の神観念の誕生

↳ 神の人間化 (化身、権現)、人間の神化 (人神) が自由に矛盾なく行われてきた。

社会的上位者 = カリスマ (同時に宗教的カリスマ) を帯びる。

= 政治的カリスマと宗教的カリスマの同一視。

◎ 日本宗教、日本社会の構造を考える上で重要。

神道も外国の宗教などの導入、受容によって崩壊しなかった (以下、エリオット)。

- ・国家祭祀、農耕儀礼、家族宗教として国民の精神生活の支柱的役割。
- ・俗信化、迷信化の道はたどらない
- ・神仏習合、両部神道など神が仏の化身とみなされ、多数の神社が僧侶の手に委ねられたのにもかかわらず、神道自身は抑圧されていない。

死者 = ホトケサマ (他の仏教文化に存在しない用法)

⇒ 死者が神となることとの模倣か？

3-2-1 山伏の発生

神話：熊野、吉野に山の呪術集団

奈良末～平安中：陀羅尼、雑密を受容、山の修験者に。

開祖：役君小角とされる。

『続日本紀』文武3年：呪術師

『日本霊異記』：孔雀明王呪を受持し、自在に呪的飛翔を行う (密教への傾倒)。

修験者：山中の苦修練行などを通じ、多くの神秘体験を経て超人間的呪力を身につけようとした (宇宙山であり、死と再生の母神としての霊山に身を臥すことによって、その神霊と同化し、イニシエートされること = 俗界の人間として死に、胎蔵界の大日、すなわち大地母の胎内に入り、修練を重ねて、最後に聖界の専門家として再生する)。

3-2-1-2 山岳信仰 (掘井) …周囲に気象上の影響を及ぼしたり、際だった景観をそなえた山

は、山そのものが神の籠もる聖地、すなわち神体山として崇拝された【神道】

宇宙の柱：コニーデ型の孤峯火山

水分山 (みくまりやま)：農耕生活に影響をもつ山

葬所型：死者死霊入山 ⇒ 霊山化 ⇒ 密教系寺院の開創

↳ 山の巫者 (神と山と農民の間にたつ者)：

仏教教理受容 + 自己特有の観念への習合、具体化 = 山中他界の観念

神体山での祭祀は、人がみだりに立ち入ってはならない山中の特別な場所（禁足地）で行われたが、山そのものは人びとが薪や山菜などを採りに行く場所でもあり、山麓の生産生活と深く結びついていた【神道】

3-2-1-2 山中他界について

- ・『日本霊異記』大伴屋栖古連公：極楽と地獄が同一の山中、同一平面で描かれる。
- ・『往生要集』（源信）：「厭離穢土」（地獄思想をとく自己の罪悪感と現世汚濁観）+ 念仏思想（「欣求浄土」の彼岸へ導かせる）。
- ・日本は、六道輪廻ではなく、冥界歷程を説く話が多い。

◎地獄思想 + 他界歷程 = あらたな浄土教の基盤
修験道形成の基盤

⇒地母神の胎内復帰、シャーマンのイニシエーション的試練

：死霊が宇宙山や地母胎内に復帰し、人間界から霊界の住民になるためのイニシエーション的試練 = 仏教による潤色

cf. 『扶桑略記』道賢上人冥途記に載るパターン（道賢の金峰山修行記）

呪的灼熱観（枯熱、喉舌枯惨、氣息不通）－死－他界遍歴（禅僧：執金剛神）－神的人物との出会い（宿徳和上の案内）－宇宙山としての黄金浄土（金山、金峰山の浄土：宿徳和上＝蔵王菩薩：牟尼の化身）－大池中の島中の蓮華座（宝塔・法華経、大威徳城）－一切の災難疾病の根源の解明（日本太上威徳天：菅原道真）－その救済法の伝授（道賢が道真のために祈祷すること）－秘呪の解明（蔵王菩薩からもらった秘呪について）－改名（道賢⇒日蔵：別人格への再生）－蘇生

→道賢上人のパターン

シベリアや中央アジアのシャーマンや、現代の新宗教の教祖たちに通じる。

中央アジア：解体、骸骨への還元、鍛冶屋による鍛え直し（狩猟、牧畜文化特有）

農耕民族：洞窟、岩穴を通過しての他界遍歴、地母神への胎内復帰。

修験道の修法の際の本尊：不動明王（聖無動尊大威怒王）が多い

= 火生三昧に住む姿。

修験者は不動護摩法によって不動と一体化（「入我我入」）。除魔調伏の呪力などを得る（シャーマンの呪的燃焼の儀礼的象徴化か）。

3. アラヒトガミ

3-3-1 日本人の信仰の基本的構造

1) 氏神型

氏神（同族神、地域神）：

- ・特定の氏族、同族、特定地域集団の維持と統合のシンボル
- ・閉鎖性の強い信仰。排他的。cf. 「祠官異姓の祟り」
- ・神：機能神ではない。全知神的性格。
- ・氏神：氏子と系譜的な関係と特殊な契約意識
- ・信者：特定の氏人、その集団内で出生した人。

- ・ 神の権威、威力：氏子の社会的政治的経済的文化的地位や特色を直接反映

2) 人神型 (アラヒト神：住吉大神、石清水八幡神、北野天神など特殊な神霊)

- ・ 超氏族的。広域信仰 (統合的シンボルではない)
- ・ 開放性、包摂性 (氏神 = 封鎖性、排他性)
- ・ 神：強い個性：機能神的、人格神的性格
- ・ 神と人：個人の選択的な信仰。強い庇護と恩恵
- ・ 信者：出自は問題とならない。神が特定の人、家系を神と人の仲介者として選ぶ (神の子孫) → 強力な神職家へ

神の権威、性格：仲介者の呪術宗教的能力などに左右される。

● 実際は1)、2)が混交している

ex. 北野天神 - 菅原道真 - 崇り

神：災害や崇りで出現する (三輪大物主神が、大田田根子に自らを祀らせるためにまず疫病を起こした) → 怨霊、御霊信仰 → 現在まで。

【氏神】 本来日本のウジは父系母系に両属。律令に対応するなかから「排他的に祀られる祖先神、氏神」が登場した。しかし、宗像、住吉：日本の守護神化する神 = 本来の場である氏族集団の土地の祭りとの関係を薄める。一方、氏の指導的立場にあった男性は官人として平城京居住が義務付けられた。

- ・ 日常的な親族間の交わりから離れる。
- ・ 本来の場所ででなく人工的な空間で祭祀が行われる。

= 自然と結びついたとされる神の実感が失われる (本来：土地神に豊穰を願うもの)

- ・ 土地も法的に国家から貸与される物になった。

= 氏の長が没落すると、氏族全体と地域の結びつきも失われる。

= 結局官人は共同体から遊離した個人となり、氏族 (天皇と氏族の絆) と神々との一体感も失う。

「この趨勢に対して、もう一度天皇との連帯感をとりもどし、官僚制のなかで安定した位置を見出そうという強い欲求」 = 「氏神の創設」であった。

律令制の氏 = 「父姓継承官人組織」：父系集団を中心とする構造を持ち込んだ。

→ 氏族の再構成 = 氏神 (言葉としては8世紀後半以降) の創設。

藤原氏の氏神、春日社。三笠山 (神奈備山) に鹿島からタケミカツチ他を下ろす。遷都すると藤原氏は春日社から分霊を勧請する。地方でも土地の信仰を土台に、父方の系譜的祖先を重ね合わせることで氏神を作った。

→ 荘園制：領主が寺院鎮守、往生鎮守になって自領の守護神として鎮守神を勧請

荘園の衰退：地域の神々も鎮守神と呼ばれるようになる

畿内：惣村の成立 = 荘園の鎮守を村の鎮守としたり、有力な神を勧請。

江戸時代：産土神：自分の生まれた土地の神も信仰 = 鎮守神、産土神が同一視化 (氏神)、

= 地域の守護神を崇敬する人びと：氏子 【神道】

3-3-2 神の妻

卑弥呼、天照大神、倭迹々日百襲媛、息長帯日売：女巫王の典型的な姿。

古代政治：呪的カリスマによって、政治カリスマが指導される。

次第に呪術王は形式的なものへ → 天皇が政治宗教的カリスマへ

= 天皇が天皇たる資性獲得をする秘儀を生まれる。

→ 大嘗祭 (鎮魂、新嘗、神楽) / 新嘗祭 (毎年カリスマを更新)

∴ 大嘗祭を行えなかった天皇 = 半帝

皇帝：万物を支配する「天」の「命」を受けて人民を統治する＝革命が起こりうる

天皇：天に在る神の子孫であり、天の最高神の血を引く存在＝万世一系（「記紀」）：天命思想を
読み替えて創作されたもの。アマテラス：持統（高天原広野姫天皇）、元明がイメージ。【概説】

3-3-3 神と人の交流

3-3-3-1 ミコ

- ・アラヒト神系統の神（大神、住吉、賀茂、北野、祇園、津島、八幡、稲荷、春日、鹿島）
＋アラヒト神を奉じたシャーマンの巫祝家の活動：日本人の呪術宗教的生活に
大きな性格づけ
- ・神社の祭神の大半が巫覡を巫覡を媒介として現れた神によって占められる。
神社の祭り：降神昇神の儀、神木、幟などの象徴＝垂直的な神の降臨を請い待つ
神輿、山車の渡御、競馬角力、歌舞賽神などの神段行事にも痕跡

本来、神は、目に見えない精霊のごとき存在であり、特定の場所に常に定まる存在ではないと
考えられていて、祭りをするために磐座、ヒモロギを依り代として「臨時にカミを招き寄せて
祭りを行った。…森羅万象は抽象的な「天」や「気」の作用ではなくて、数多くの個別的な人
格神（八百万の神）の働きとして表現される【神道】

ミコ 神に仕える者：神の子、神の妻の兄とその子孫
神を表したもの。

神＝霊石、霊玉について若宮誕生の奇瑞を示す。尸童、護法童子など＝稚児

アラヒト神の出現＝突然、すぐれたシャーマンの口を借りて神意を伝える。

↳「尸童（よりまし）」とその一族によってまつられる（大神の若宮として）。

尸童＝神の眷属、神の子孫、神の妻＝カミ

アラヒト神系のシャーマン＝崇敬者を集める必要：時勢に敏感、人心の帰趨を掌握、
人情の機微に達して、他者を承服させる託宣技術と呪術を身につける。

人神型の大神：次第に若宮、若宮神の上に君臨する統御神の色彩を濃くする。

【巫女の変化】

古くは女巫に重点（男巫もいたが）。

→託宣能力の衰退、家父長制社会の定着→男神主が神社信仰の正面に

巫女：民間に沈潜、神社のアクセサリ的存在

- 1) 憑きもの信仰＝俗信、迷信化への転落現象
- 2) 新宗教の教祖型人格への再昇華化現象：生き神さま

3-3-3-2 たたり

大化の改新前後＝異常な民間の呪術宗教的な動き（童謡など）

【中国の社会不安、動揺に対する民衆の呪術的反応】

童謡（わざらた）、凶讖（預言書）、教匪（宗教的反乱）

日本：宗教的一揆が社会変革の推進力になるのは、一向一揆と法華一揆のみ。

カリスマ的指導者：シャーマニスティックな人びと。

- ・仏教呪術、陰陽道的呪術⇒国家儀礼（朝廷主催、国家的規模）

・シャーマニズム的性向は民間に拡散、潜在。民衆の心理的不安に対処する機能。

A. たたりの発生

奈良末－平安初（社会動揺期）、民間巫覡の活躍

律令時代＝民間布教の禁止：巫覡と仏教の対立。

＝仏教がシャーマニズムと呪術を異端、淫祀邪教として排撃しようとした：
仏教の正当性を強調して、国家体制との結合を一層緊密にしようとした。

但し、行基など。7世紀後半から8世紀：地域社会への仏教の急速な浸透。『日本霊異記』。8世紀中後期には民衆の間で初七日、四十九日などの仏教習俗が流布【概説】。

・東大寺大仏建立の託宣：宇佐八幡の巫女大神杜女－入京の前日、剃髪して「祢宜尼」となって東大寺に参入＝シャーマニズムの変質（仏教、陰陽道の影響）

↔ 仏教、陰陽道、民間道教の変質

国家祭祀としての神道儀礼と習合、日本のシャーマニズム的要素を包摂すること無しには民間に定着できない。

↳ 神道と仏教の妥協：神宮寺（神社に附属する寺院）の建立、地主権現の寺院内への勧請。

しかし、平安中葉まで両者の対立も鋭い。

孝徳天皇：仏法を尊び、神道を軽んず。

伊勢神宮（平安中期）：仏教関係用語に対する忌詞

神仏習合：巫者を仏教の中に包摂すること、仏教を巫者の宗教に近接させること。

∴ 密教と日本的シャーマニズムが結合しえた。

【本地垂迹】法華経如来寿量品による。「この世に現れて悟りを開いた釈迦は実は仮の姿で、その本心身は永劫の昔より存在していた」。天台教学におけるシャカの仏身論：応身（歴史上の釈迦）、報身（久遠の昔に成仏していた釈迦）の影響。ただし、仏教は在地の神々や歴史的人物を仏菩薩の化身とすることで根づいていった（日本だけでない）【神道】。

初期段階：御霊信仰、

験者、陰陽師の台頭

念仏ひじり（鎮花祭、疫神祭りと習合した民間の信仰）

＝かれらに協力、駆使せられた霊媒的な巫女の存在

奈良時代：桓武の頃から個人の祟りが本格化。

すでに、疫疾に際して疫神祭、疫病流行を予防する沈花祭が恒例化

桓武以前は疫神についての個性的な解説は見えない

桓武：同母の皇太弟早良親王＝初の大々的なたたりの例

→大規模な鎮魂、崇道天皇を追号、廃后井上内親王に皇后の称を追復、天皇陵、皇后陵とする。

「神の祟り」→「人間の怨恨」。

律令体制形成期の社会変動の過程において、神の観念が自然神的存在から人格的存在へと変化した。祟りの機能も神から人の霊へと拡大された（貴族）。民間では疫神の跳梁と考えられたため、疫神慰撫の載礼が行われた。【神道】

⇒ 霊の意思を伝達する仲介者と、それを支持する一群の共通心理。

863年：御霊会（崇る神と密教の融合 【概説】）。

怨霊を経典の講説、歌舞、騎射、相撲、走馬、演劇などを行って鎮める＝民間の風俗が公的行事となった【概説】。

道真：世間の災難のことを一手に掌握。995年巫女の口を借りて託宣。

994年。天下大疫に際して御霊会。

→朝儀でなく民間より起こったもの（民間シャーマンの活躍）。

（民間では御霊会が行われ続け、神霊を神輿に移して神仏混淆の祭祀を行った〔都市民の新しい信仰〕→牛頭天王をまつる祇園社〔観慶寺感神院：八坂神社〕などに発展【概説】）

【怨霊の資格】民衆に同情され、納得される怨魂。民衆の潜在的、抑圧された験力の横暴さに対する攻撃性のはけ口を提供するもの。

B. 御霊信仰と法華経、浄土教

「政争の犠牲となった皇族、上級官僚の死霊のみが御霊神

→法華経の「悉有仏性」の影響→他界への希望をつなぐ浄土教信仰を醸造する基盤

現世の敗者：報復と志の完成を来世に期待。

勝者（怨霊の跳梁に悩む）：人間性や自己の行為に深刻な半生と鎮謝

⇒自己の希望と安心のためには、ひとしく来世的かつ呪術宗教的たらざるを得ない。

3-3-3-4 加持祈祷

神→個人の霊魂の変化＝外来宗教と外来文化の浸透による個我的自覚に基づく変化。

⇒天下大疫：「複数集团的怨恨の一斉蜂起」という考えが一般に受け入れられる＝怨霊、生き霊のたたり。

⇒祈祷僧、民間念仏ひじり、宿曜師、陰陽師が信頼を集める

防衛手段（卜占、祓い、物忌み、方違え）、規程（忌服、触穢）

→手厚い葬儀や死者供養の風潮。

加持祈祷に「よしまし」などと呼ばれた霊媒が利用される（擬制巫）。

【よしまし】東密（真言密教）台密（天台密教）の修験者、祈祷者の加持に連れられて、一種のエクスタシー、憑依状態に入って怨霊や物怪として託宣を述べる

e.g. 密教と合流＝シャーマンの性格の変化（擬制シャーマン）＝踊り念仏にも吸収。

・真言師の呪術力：加持祈祷により物怪を積極的に調伏する＝神秘性、信頼を得る。

◎病気などの原因を死霊や生き霊のたたりとする（古代アニミスティックな原理）＋験者と民間巫女、擬制巫女によって具体化。

3-3-3-5 口寄せ

11世紀：死霊の口寄せをする巫女の登場⇒御霊、怨霊信仰から派生。。

＝死者の生前の念願や言い残したことを聞きたい雰囲気

・擬制巫の集団が出来上がる。一村に一人ミコが定住。

あるきミコ⇒三河：イチコ、長野県小県郡禰津村：信濃ミコ、アガタミコ、ノノウ、旅女郎、関東：梓ミコ、笹ハタキ、大弓、新潟：マンニチ、モチ、山梨、和歌山：白湯文字

格子一家⇒京都：等持院、北野のほとりに巫女村、大原みこ、大阪：天王寺村：巫女集団
口寄せミコ：呪的カリスマとしての資質に欠ける。神や霊による召命、成巫過程における精神異和や神秘体験がない＝真正巫の特徴を欠いている。
＝エクスタシーやトランス状態にならない、歌舞賽神は殆ど行わない等々
いたこ：弱視、盲目の女性の職業教育。師匠どり、徒弟制、伝授許しのイニシエーション（死と復活）。

◎東北の口寄せ巫女＝修験道の影響が強い。

- 1.イラタカの数珠ほか。
  - 2.九重の守り：背中：経文などを収めた黒塗りのツツをナナメ。額：結び切りの鉢巻き、肩：鈴のついた数珠袈裟、
- ・神下ろし（韻文体、メロディー）⇒ほとけ下ろし（口寄せ、平板）⇒帰す（韻文体）＝「ひとりがたり」と「問い口」
横死者＝特別なミコ：御霊、怨霊信仰の系譜。
  - ・口寄せミコ＝神聖者であるとともに触穢者＝社会的身分は低い。

3-3-3-6 踊り念仏

奈良末～平安中期：法華の持経者、念仏ヒジリ

罪福の因果、予兆卜占（簡単な教義や呪術）、陀羅尼や念仏をとなえて攘災治病を行う。

鎮護国家の仏教に包摂された攘災のための法華滅罪信仰⇒最澄、円仁らによって天台法華宗に統合。円仁の四種三昧の一つ、般舟三昧経による常行三昧（90日間阿弥陀の周りを阿弥陀を念じながら回る）の招来…朝題目夕念仏（天台浄土教）へ。

奈良末：阿弥陀信仰の台頭＝死者追善、女人成仏、悪人成仏

法華経（密教）：現世利益の経典
阿弥陀経：死後安穩の法

＝真言念仏が盛んとなる

9世紀の宮中：真言院念仏 930年醍醐天皇大葬：多くの念仏僧
葬送念仏が増える。

【臨終】験者や祈祷僧が退出。念仏僧が臨終念仏、断末魔の念仏。
怨霊、御霊とならず阿弥陀浄土に往生することを期待。

以下『概説』より：

平安前期、天皇家。臨終出家（死直前の出家儀式。日本独自）、戒と戒名を授かる。摂関期には貴族全体に広がる。女性は尼であってもさらに髪を剃る（二重出家）。平安末期：死後出家→現在の死後戒名の風習の発生。

⇒浄土教（二つの流れ）

a.天台の止観、観念の念仏→源信（942-1017）：比叡山中興の祖、『往生要集』

【往生要集】「顕密の教法」は難しすぎるので、「念仏の一門」に限って「経論の要文」を集めてわかりやすく、かつ修行しようとした。「厭離穢土」「欣求浄土」。心に阿弥陀の姿を思念して観想念仏を主とする天台教学の立場を崩していないが、それに耐えられない人には仏名を唱える称名念仏を勧める。第6の「別時念仏」では日時に限って行

う念仏の具体的な実践法法が示される：「臨終行儀」 死の床にある人に対して念仏を勧める（平安時代の風習に合致）【概説】

b.民間の呪術的念仏→空也（903-972）：日本に念仏を広めた先駆者（狂躁的、呪術的／道真怨霊＝社会不安、民間に沈潜した巫女の託宣＝歌舞賽神の異常興奮）→阿弥陀の聖（民間行者）

一遍上人「踊り念仏」（呪的カリスマ）

民間のシャーマニスティックな、雑信仰的な、原始的で民族宗教的な性格。

近世は念仏踊り、歌念仏として芸能化→出雲の阿国（歌舞伎の基礎へ）

鉢たたき、鉦打ち、茶筌、鉢屋、六齋念仏、泡齋念仏、芦屋念仏、植木念仏、葛西念仏、六道念仏(念仏芸能集団)

4. 現代日本とシャーマニズム

4-1.人間神化傾向

- 1) 遺念余執が死後も予想され、崇りを示した人
- 2) これを統御する一段と高い神の存在

八幡－若宮八幡（悪源太義平）、新田八幡

人を祀る神社に「若宮」「今宮」が多い。八幡神に怨霊の統御という信仰があったよう。若宮は憑き、語る神＝賀茂、石清水：奇瑞は若宮の巫女によって表された。八幡も東遷当初は一つの若宮＝御霊をもって人びとにあたらしい奇瑞を示そうとした。

近世：巫覡の媒介を必要としない。

秀吉：豊国大明神（足輕出身、氏神を持たない：死後後陽成天皇とり神号）

・為政者が氏神を離れて自らの宗教的権威付けをした嚆矢

・人神信仰のうち、崇りと無関係なものとして最初期のもの

家康：東照大権現（神式葬儀、山王一実神道により大権現の神号が勅許：東照宮）

・朝廷による伊勢神宮への例幣使とともに日光例幣使

=幕府が天皇の奉幣によって東照宮の地位を伊勢神宮と同等にしようとした。

山崎闇斎：垂加霊社：生前に自分の霊を神として祀り、自ら参拝。（「神」＝「理」。朱子学の「天人合一」から、人間の心にはか「神の霊」が宿る：神が人間に内在。）

=（人間神化の乱用：メモリアルホールの頌徳碑の別様式）

無限に神を創り出す。神は自在に人に憑き、権化する。御霊神（苦しみよみがえる神）：現世にいたときの苦しみ、うらみ＝因果応報と習合。より偉大な神、不偏なる仏に救済される神+儒教倫理と習合＝祖先のみならず、現実の父母、君主にも半神性を認めようとする。

4-2.女性の強い被暗示性（村や町での女性巫の存在）

…理性の領界を超えた非合理的なるものへのエモーショナルな信頼。

4-3.非合理的、エモーショナル

合理的思考と意志的行動よりは、非合理的、エモーショナルな性格と行動をとりやすい。

祭り、年中行事→オーガスティックな要素が強い

・社会的危機、社会不安：社会離脱や舞踏によるマス・エクスタシーに終わることが多い。

- ・宗教信者：「神父信仰」「宗祖信仰」「教祖信仰」「法主信仰」「会長信仰」
= 宗教の教理的、系譜的、普遍的信仰現象ではない。
- ・直接的、具体的な生きている宗教的指導者への熱狂的、情緒的な信頼と支持
= 個別主義的、具象的、パーソナルな宗教的なカリスマへのエモーショナルな自己委譲 = 「天皇制」を支持する原理。

→目的達成、個別主義へとコミット

自我意識の発達を阻み、普遍的価値にふかくかかわる傾向を拒む